

アセスメント・ツールとしてのコラージュ： その信頼性について ～同カテゴリー・異素材（雑誌）を用いた作品の比較から～

片野杏南 明星大学大学院人文学研究科心理学専攻 石井雄吉 明星大学

キーワード：臨床コラージュ技法，アセスメント，素材統制，信頼性

要約

臨床コラージュ技法は、コラージュ療法と心理的アセスメント・コラージュとに分けることができる。前者の場合、素材の自由度は表現（作品）の自由度を高めることができ、治療的に奏功することが期待されるが、後者の場合、素材の影響により表出される心的要素が異なると、アセスメントとしての信頼性（再現性）は低くなる。

平本（2009:online）、床井（2011）は、同一人物が制作したコラージュであっても素材が異なると、違った作品になることを明らかにしている。しかし、いずれも同一カテゴリーに含まれる異なった雑誌を用いたコラージュ作品の比較ではない。そこで、本研究では、同カテゴリーに属する異なる素材（雑誌 A・B 群）を用いて、10名の大学生が制作したコラージュ作品に対する印象評定の結果を t 検定により比較し、アセスメント・ツールとしてのコラージュの信頼性を検討した。印象評定には今村（2004）の 3 因子（安定性・表出性・創造性）30 項目で構成されている CISS を用いた。

t 検定の結果、安定性因子を除いて、2 つの因子で有意差を認めた。安定性因子でのみ有意差を認めなかったことは、コラージュ制作者が一般の大学生であり、特に精神的な問題を抱えているわけではなく、作品を構成する切片的構成に安定性を感じられた結果であると考えられた。言い換えると、切片的構成が反映する安定感は素材の影響を受けにくいと、精神的な健康度の目安になると考えられる。しかし、他の 2 因子では有意差を認めたため、コラージュ作品は素材の影響を非常に受けやすいことが確認され、臨床コラージュ技法をアセスメントとして利用するためには、素材を統制する必要があると考えられた。

I 問題

臨床で活用されているコラージュは、本邦において、森谷（1993）が「持ち運べる箱庭」という発想からコラージュ療法を考案し、1987 年の第 126 回当会精神神経学会にて「心理療法におけるコラージュの利用」を発表して以来、コラージュ療法として臨床において活用されている。そのようなコラージュだが、コラージュ療法という側面と同時に、Buck & Provancher（1972）や Lerner（1979）のような古典的な研究を始め、

森谷（1999）のように心理アセスメントとしての側面をも併せ持っている。

そもそもコラージュは、フランス語で coller（コール）、つまり、「糊で貼る」という言葉に由来しており、美術の技法として用いられてきたものが臨床に導入されて発展してきた（杉浦,1994）。そこで、筆者らは美術の技法としてのコラージュと臨床技法としての同法とを区別するために、本稿では後者を臨床コラージュ技法 clinical collage technique と呼ぶことにする。

さて、臨床ラージュ技法には、切り抜き（切片）を予め箱に入れて用意した「コラージュ・ボックス法」と、制作者が雑誌そのものを切り抜くマガジン・ピクチャー・コラージュ法とがみられる。コラージュ・ボックス法は、はさみなどの刃物を扱うことが危険であったり、難しい場合に有効である。また、一般的には個人療法として用いられているが、青木（2001）はコラージュのグループでの用い方として、集団個人法（集団で個別に制作）と集団集団法（集団において小グループで1つの作品を合同で制作）を紹介している。

そのような臨床コラージュ技法であるが、まずはこれに用いる素材について考えてみたい。森谷・杉浦（1993）によると、予め用意する素材は、女性誌、男性誌、子どもの雑誌、時事関係、家事・家庭、旅行、自然、科学などに関する雑誌やカタログ、通信販売のカタログ、新聞の折り込み広告などが推奨されている。しかし、彼ら（1993）はこれら全てを集めずとも、クライアントはそこにある素材の中から必ず自分のイメージに合ったものを不思議と見つけ出すものであると述べている。

臨床コラージュ技法と関連の深い箱庭療法に用いられる玩具は、繰り返し使用することが可能であるが、今村ら（2015）は、コラージュ療法の場合、素材を画用紙に貼ってしまうことから、同様の物を繰り返し使用することは困難であると指摘している。つまり、素材の再利用に限界があるとすれば、また、伊藤ら（2005）が、素材の影響に関する研究をレビューして、コラージュ作品を形式的・内容的側面から客観的に分析していくことには困難があると指摘しているように、臨床コラージュ技法の作品の解釈は、素材の自由度の高さ・素材の違いを抜きにしては考えられないことになる。

このように素材の影響を受けるコラージュ作品についての興味深い研究として、平元（2009：online）は、同一人物が異なる雑誌を用いて制作

したコラージュを比較した結果、貼り方は一貫しているが、貼られる内容は雑誌の違いの影響を受けることを明らかにしている。さらに、床井（2011）は、同一人物が、日本語の新聞、英字新聞、そして、雑誌の3種類の素材をそれぞれ単独で用いたコラージュ作品を印象評定により比較した結果、どの因子においても英字新聞の得点が高い結果となった、つまり、同一人物が制作したコラージュであっても素材が異なると、違った作品になることを明らかにしている。

しかし、いずれの研究も同一カテゴリーに含まれる異なった雑誌（同類・異素材）を用いたコラージュ作品の比較は行っていない。つまり、例えば、同じファッション雑誌というカテゴリーに含まれても、異なる雑誌を素材とした場合における作品への影響についてはまだ確認されていない。

そこで、同じカテゴリーに含まれる異なる雑誌を用いたコラージュ作品の比較方法が課題となる。例えば、数量的分析で性格傾向との関連を検討した研究を見まると、佐野（2000）は切片数が多いと劣等感が強いと報告しているが、一方、佐藤（2002）はその逆で、切片数と劣等感とは負の相関関係にある、つまり、切片数が少ないほど劣等感が強いと指摘し、両者はまったく逆の結果となっている。

このような齟齬には、研究者ごとに、コラージュ作品を分析する際の基準が異なっていること、そして、素材を統一して行われた研究なのか、そうではないのかという要因が関係していると言える。

ここで、臨床コラージュ技法のヒントになった箱庭についての研究方法を考えてみたい。本邦に箱庭を導入した河合（1969）は、箱庭の作品を見る場合、全体として受ける感じ、印象のようなものが重要であり、箱庭の表現全体こそが「自己像」と述べている。さらに、伊藤・石井（2009）は、アルコール依存症についての研究で、作者の心理理解には作品からの印象が有効であると指摘

している。

このように、表現技法の理解については印象が重要な解釈要素となっている。コラージュの印象評定尺度としては、今村（2004）の「安定性」、「表出性」、「創造性」の3因子30項目からなるCollage Impression Scoring Scale(以下,CISS)がよく用いられている。今村（2004）は、「コラージュの表現が偶然的要素から成立している部分が大きい」と指摘しているが、これは形式的分析の限界を示唆している言葉である。伊藤・石井（2009）のアルコール依存症者についての研究でもこのCISSが用いられている。

II 目的

同類・異素材（雑誌）を用いたコラージュ作品を比較することによって、臨床コラージュ技法の心理アセスメント・ツールとしての信頼性を検討した。

III 方法

1) 対象（制作）者

統制された同類・異素材群のA・Bを用いてコラージュ制作を行った対象者は、大学生10名（男性5名、女性5名；平均年齢21.3歳、標準偏差0.46）であった。

2) コラージュの施行方法

本研究では、マガジン・ピクチャー・コラージュ法（森谷・杉浦, 1993）を用い、施行にあたっては、カウンターバランスを図るために、対象（制作）者は1度目の施行において素材群Aを用いた素材A先行群（2度目は素材群B）と、1度目の施行において素材群Bを用いた素材B先行群（2度目は素材群A）との2群に分けた。1度目と2度目との施行は1か月の期間をあけて行った。

3) 素材

統制素材として、素材群Aには5雑誌

（FINEBOYS, 2017年6月号、美人百花, 2017年6月号、カンタン!パパッと!スピードおかず, 2013年10月2日発行、じゃらん, 2017年6月号、PHEVのカタログ）をセットとして、素材群Bには5雑誌（MEN'S NON-NO, 2017年6月号、Sweet, 2017年6月号、2品で完結晩ごはん献立, 2013年11月27日発行、Tokyo Waker, 2017年6月号、スカイラインのカタログ）をセットにしたものを用意し、全ての対象者に提供した。また、台紙にはB4サイズの画用紙を用いた。

4) 印象評定

10名の対象者がA・Bの両素材群で制作したコラージュ作品については、20名の評定者（男性10名、女性10名；平均年齢21.1歳、標準偏差0.99）がCISSを用いて印象評定を行った。

5) 結果の処理方法

CISSについては、評定者ごとに各因子（安定性・表出性・創造性）の項目得点を合計し、その合計点を全評定者で因子ごとに平均し、因子別に両群でt検定を用いて比較・検討した。

6) 倫理的配慮

本研究にあたり、対象者には次の5事項について説明し研究協力の同意を得た。①収集したデータや個人情報については本研究でのみ使用し、それ以外の目的で使用されることは一切ないこと。②得られたデータや個人情報については匿名化され、統計的に処理されるので個人が特定されることはないこと。③収集したデータは施錠可能な部屋で保管し、学外へは持ち出さないこと。④収集したデータは研究終了後に一定期間保管した後、責任を持って適切に処理すること。⑤施行中に気分が悪くなった場合、いつでも中止出来ること。

IV 結果

Table1に示すように、素材群Aを用いたコラージュ作品と素材群Bを用いたコラージュ作品とに対する印象評定得点をt検定によって比較した結果、安定性尺度では有意差を確認できなかったが、表出性尺度では、素材群Bに比して、

素材群Aを使用したコラージュ作品のほうが有意に高い得点であり($p<.01$)、創造性尺度においても、素材群Bに比して、素材群Aを使用したコラージュ作品のほうが有意に高い得点であった($p<.05$)。

Table1

	素材群 A 平均 (SD)	素材群 B 平均 (SD)	t 値
安定性	44.8 (3.99)	44.5 (3.60)	0.28
表出性	33.8 (2.50)	31.6 (2.70)	4.25 ※※
創造性	22.4 (3.20)	21.4 (2.90)	2.38 ※

※ $p<.05$ ※※ $p<.01$

V 考察

Table1に示したように、素材群Aのコラージュ作品と素材群Bのコラージュ作品との印象評定得点を比較した結果、安定性因子では有意差を認めず、表出性および創造性で有意な差を認めた。まず、安定性因子で両群に差を認めなかったことについては、この因子が心理的な安定性や統合性を反映していることに起因していると考えられる。そして、重要なのは、この安定性が素材として何が使われているかということよりも、この因子に含まれる「安定感のある」「落ち着いたもの」「雑然とした(逆転項目)」「無秩序な(逆転項目)」といった項目が象徴するように、素材から切り抜かれた“切片の構成”によって感じられていることである。

本研究において素材A・B先行群を用いてコラージュを制作したのは、一般の大学生であり、特に精神的な問題を抱えているわけではないため、彼らは概ね心理的に安定していると推定できる。したがって、彼らの心理的な安定性は、作品における切片の構成に反映されたと考えられる。さらに言えば、素材が異なっても、精神的な安定

性や統合性は、切片の構成という形で作品に反映されるのであろう。したがって、安定感の素材の影響を受けにくいことを、どのような素材を用いたコラージュ作品であっても精神的な健康度の目安になると考えられる。

古典的な研究だが、Lerner & Loss (1977)は、12名の精神科入院患者の作品と12名の病院職員のコラージュ作品とを比較した結果、患者群の作品における全体のバランスの乏しさなどを指摘している。このことから、素材の影響を受けにくい安定感の素材は精神的な健康度の目安として有効であろう。

床井(2011)は、通常の雑誌コラージュと新聞コラージュ(日本語・英語)とにおける印象の違いを比較するために、CISSをもとに新たな印象評定尺度を制作し検討したところ、雑誌コラージュと新聞コラージュとに対し、ほとんどの因子(消極性・質実性・創造性・知性)で英字新聞コラージュの方が有意に高い得点であったという。

また、平元(2009: online)は、コラージュ作品とYG性格検査との関連が雑誌の影響を受けるのかについて、貼付形式、切片数、内容を比較し

た結果、作品の貼付形式は雑誌の統制の影響を受けなかったが、貼付内容に関しては、少なからず雑誌の影響を受けたと述べている。

平本 (2009:online)、床井 (2011)、そして、本研究から、構成や貼付形式は雑誌の影響を受けないとしても、コラージュ作品は素材の影響を非常に受けやすい自由度の高い (不安定な) 臨床的ツールであることが明らかとなった。つまり、臨床コラージュ技法の作品において表出される心理的特徴は、素材によって影響を受けることになる。ただし、いずれも作者の異なる側面の反映と考えると、それぞれに意味がある。言い換えると、素材によって喚起される心理要素が異なって、それが作品として表現される可能性があるのかもしれない。

今村ら (2015) は、臨床場面で同じクライアントに基本材料集を連続して使用することについて、コラージュ療法の魅力である“素材と出会う新鮮な驚きや偶然性”を損なうことに繋がるため、注意が必要であると指摘している。しかし、アセスメントの場合は本研究で示すように、その都度素材が異なると信頼性に欠けることになる。したがって、“素材と出会う新鮮な驚きや偶然性 (今村ら, 2015)” は、臨床コラージュ技法をコラージュ療法として利用した場合に該当すると言えるであろう。

ここにみたように、臨床コラージュ技法をコラージュ・アセスメントとして利用するためには、素材の統制が必要ということになる。

VI 本研究の限界と課題

標準得点化された心理検査と異なり、コラージュは市販の雑誌等を用いているため、全国的な統一アセスメント・コラージュを開発することは現実的ではない。そこで、素材を統一したアセスメント・コラージュを制作するとしても、結局は各臨床現場における標準アセスメント・コラージュの範囲を超えることができないのかも知れな

い。

また、今回の研究では、対象者の少なさは否めない。したがって、本研究の結果は、“素材を統制しないコラージュ作品によるアセスメントはより慎重であるべき”との控えめなメッセージに留めておきたい。

さらに、研究手法として用いた印象評定については、丹治 (2011) が、従来箱庭作品の解釈に際しては、まず全体的な印象が重視され、それをそのまま制作者の心理状態として解釈されることが多いが、その印象には臨床経験によって主観が混入する可能性があるとは指摘しているように、その信頼性、つまり、再現性についての確認が十分ではない。これはコラージュ研究についての今後の研究課題と言える。

文献

- 青木知子 (2001). グループにおけるコラージュ技法導入の試み～コラージュエクササイズを用いたグループエンカウンターと気分変容についての検討～. 日本芸術療法学会誌, **32**, 26-33.
- Buck, R.E. & Provancher, M.A. (1972). Magazine picture collages as an evaluative technique. The American journal of occupational therapy, **26**, 36-39.
- 平本 彩 (2009). 雑誌統制の有無によるコラージュ効果の差及びアセスメント指標の検討. [online] https://www.obirin.ac.jp/academics/postgraduate/psychology/course_clinical/papers_masters/r11i8i00000ip4u-att/207j5019.pdf (2018/11/6,access)
- 今村友木子 (2004). 印象評定を用いた統合失調症者のコラージュ表現の分析. 心理臨床学研究, **22**, 217-227.
- 今村友木子・加藤大樹・二村 彩・今枝美幸 (2015). コラージュ療法基本材料シート集の開発と今後の活用. 金城学院大学論集. 人文科学

- 編. 11, 21-31.
- 伊藤 満・石井雄吉・米田順一・真栄里 仁・宮川朋大・樋口 進 (2005). コラージュ研究法再考～アルコール依存症者と健常者との比較から～. 神奈川県精神医学会誌, **55**, 69-76.
- 伊藤 満・石井雄吉 (2009). コラージュの変化を通してみたアルコール依存症者の病理性. 心理学研究, **80**, 215-222.
- Lerner, C. & Ross, G. (1977). The magazine picture collage: Development of an objective scoring system. The American journal of occupational therapy, **31**, 156-161.
- Lerner, C. J. (1979). The magazine picture collage: Its clinical use and validity as an assessment device. The American journal of occupational therapy, **33**, 500-504.
- 河合隼雄 (1969). 箱庭表現の諸相. 河合隼雄 (編), 箱庭療法入門, pp31-51, 誠信書房.
- 森谷寛之・杉浦京子 (1993). コラージュ技法の導入方法. 森谷寛之・杉浦京子・入江 茂・山中康裕 (編). コラージュ療法入門. 創元社, pp5-14.
- 森谷寛之 (1999). コラージュ療法におけるアセスメント. 森谷寛之・杉浦京子 (編), 現代のエスプリ, コラージュ療法, 386, pp51-58.
- 森谷寛之 (2012). コラージュ療法実践の手引き. 金剛出版.
- 佐藤 静 (2002). コラージュ制作者の性格特性と作品特性. 心理学研究, **73**, 192-196.
- 杉浦京子 (1994). コラージュ療法—基礎的研究と実際—. 川島書店.
- 丹治光浩 (2011). アセスメント技法としての箱庭の可能性. 花園大学社会福祉学部研究紀要, **19**, 1-14.
- 床井清香 (2011). 雑誌コラージュと新聞コラージュとの印象比較及び新聞コラージュ用印象評定尺度作成の試み. 明星大学人文学部心理教育学科卒業論文 (未公開).
- 山中久夫 (1993). コラージュ技法の導入方法. 森谷寛之・杉浦京子・入江 茂・山中康裕 (編). コラージュ療法入門. 創元社, pp137-146.

On the reliability of clinical collage technique as an assessment tool
 ～ From the comparison of collage expressions using the different materials(magazines)
 belonging to the same category ～

KATANO, Anna

Graduate School of Humanities, Meisei University

ISHII, Takayoshi

Department of Psychology, School of Psychology, Meisei University

Key Words : clinical collage technique, assessment, material control, reliability
